

## 幼児期から入学期の家庭教育調査（2）

○田村徳子<sup>1</sup>・高岡純子<sup>1</sup>・荒牧美佐子<sup>2</sup>・都村聞人<sup>3</sup>・秋田喜代美<sup>4</sup>・無藤隆<sup>5</sup>

（<sup>1</sup>ベネッセ次世代育成研究所・<sup>2</sup>目白大学・<sup>3</sup>東京福祉大学・<sup>4</sup>東京大学大学院・<sup>5</sup>白梅学園大学）

### 目的

近年、国際的に乳幼児教育への関心が高まっている。また、園や学校現場を中心に「幼小接続」の取り組みが全国的に広がっている。これらの動きの中で、小学校以降の学習の基盤として、家庭と園による幼児教育での生活習慣の自立や、物事に集中し挑戦し、人とやりとりできることを中心とした「学びに向かう力」が重要視されている。本調査では、子どもの生活習慣、学びに向かう力、文字・数・思考に対する家庭での取り組みの実態に注目した。年少児から小学1年生までの子どもをもつ母親を対象に調査を行い、家庭における子どもの学びの育ちと親のかかわりの様子、学びの形成に必要な事を探った。今回の発表では、小1の時点で、母親の幼児期のかかわりの様子について聞いた結果と、小1の子どもの学習への取り組みの様子について、報告する。

### 方法

調査対象：年少児から小学1年生の子どもをもつ母親 5,016名（配布数 14,000通、回収率 35.8%）

調査方法：郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）

調査時期：2012年1月～2月

調査地域：全国

### 結果

小1の時点で、子どもの学習の様子に関する4項目「机に向ったら、すぐ勉強にとりかかる」「勉強が終わるまで集中して取り組む」「興味をもったことについて、学校の勉強にかかわらず知ろうとする」「勉強をしていて、わからないとき、自分で考え解決しようとする」について、幼児期に母親の子どもにかかわった頻度で比べた。その結果、幼児期に母親が子どもに「家でお手伝いをさせていた」「文字や数に興味を示したとき、さらに学べるよう環境を整えていた」「子どもが自分で考えられるよううながしていた」「一緒に出かけたとき、感じたことを話し合った」ほど、子どもが学習に向かう傾向がみられた。

### 考察

幼児期に母親が子どもにお手伝いをさせる、文字や数に興味を示したときに学べる環境を整える、子ども自身が考えられるよううながす等、日頃、親子で話しながら子ども自身が考える意欲を持てるようにすることで、小1時点で学習への取り組みがスムーズになる可能性がうかがえた。本調査は、今後、年少児をもつ母親を対象に小1まで縦断調査を行う予定である。そのときに、幼児期での実際の親のかかわりと小1での学習の取り組みの関係をさらにみていきたい。